

## グレート・リセットの時代こそ山村振興を

全国山村振興連盟常務理事・事務局長 實重重実

COP26（第26回国連気候変動枠組み条約締約国会議）は、2週間の討議の末、「石炭からの段階的廃止」といった合意にたどり着くことが出来ずに閉幕しました。人類はまた一歩危機に近づいたと言えるかもしれません。

「地球が危機だ」とか、「地球に優しい」とか言いますが、それは誤った考え方だと私は思います。地球の生命圏は、大幅な環境変動にも耐えることができるのであって、危機なのは人類の方です。恐竜が栄えた白亜紀には、二酸化炭素濃度は今の数倍もあって、平均気温は10度も高かったわけです。逆に地球が3回以上経験している全球凍結の際には、平均気温は氷点下50度となり、すべての海が分厚い氷で覆われていました。こうした中でも生物たちは生き延びてきたのです。

人類が生き延びていくために「グレート・リセット」ということが言われていますが、脱炭素に向けて、あらゆる常識を逆転させていかなければなりません。それは、山村と都市の関係においても同じだと思ふのです。

脱炭素のためにグレート・リセットする社会において、山村が大きな潜在力を持っていることは言うまでもありません。日本の国土の3分の2は森林であり、その6割は山村地域が占めています。日本の温室効果ガス削減のうち、森林の吸収によるものが、6割以上に及んでいます。そして日本の森林は成熟期に達しており、このままでは二酸化炭素の吸収量が限定されますが、伐採して利用すれば、新たに植林されて伸びる樹木が大きな量の二酸化炭素を吸収することになります。

技術革新によって木造の高層建築物が可能となっており、横浜や日本橋に11階建て、17階建てといった木造建築物を建設するプロジェクトが進行中です。またコロナ禍によって人口の都市集中の危険性が意識されました。ITやAI、更には自動運転の発達によって、農山村で暮らすことにおける医療・教育・交通などの不便さもだんだんと削減されつつあります。

脱炭素・地方分散・革新技術のどれを見ても、山村地域の将来にとってプラスに働く要素なのですが、まだその恩恵が具体的に山村地域に及んでいないというもどかしさを感じます。

しかし、グレート・リセットの時代です。ここ10年で社会は大きく変わらなければなりません。その変わっていく流れの方向がどちらに向かうのかは、私たち現在の一人一人が声を上げることによって決まってくるのだと思います。山村振興に携わる一人一人の関係者が同じ認識を持って声を上げることが、極めて重要な時期になっているのではないのでしょうか。